「防災小説」とは

〇「防災小説」とは：

まだ起きていない震災について，自分の体験談のように綴る活動です．

具体的には，　少し先の未来に、特定の日時と天気を設定し，その日に大地震が発生したと想定します。

その時自分は何をしているか，家族はどこで何をしているか，自分はどんな気持ちになるか，町のようすはどうか，などを原稿用紙 ２枚程度に綴るものです。生徒ひとりひとりが，まだ起きていない未来の地震をもう起きたことかのように考え，自分が主人公となって物語を綴ります。

〇ルールは

１　そのとき、自分は何をしているのか。
２　家族はどこでなにをしているのか。
３　町の様子はどうなっているのか。
４　自分はどんな気持ちか。
５　物語は必ず希望をもって終えること。

〇防災小説の取組の経緯を紹介します。

２０１６年１１月に高知県土佐清水市立清水中学校で始まりました。南海トラフ地震による津波の高さが３２ｍに及ぶと想定されている地域です。

２０１７年からは愛媛県の愛南町（あいなんちょう）の中学校で実施されました。

２０１８年からは埼玉県の川越市内の学校で、首都直下型地震を想定した取組が実施されています。

２０２０年には北海道釧路市の中学校が取組を始めます。この年、秋田県能代東中学校（現３年生）が道徳の時間を活用し取組を開始しました。今年は能代東中学校の２年生が取り組んでいます。

巨大な津波から逃れる物語や，過酷な寒さの中を避難する物語、首都直下型地震など，それぞれの中学生が，大切な家族や友人そして地域を想いながら綴る「防災小説」は，実に多様です。この思いを互いにつなぎたい。お互いの地域を紹介し合う視点があれば，自分たちの町がまた違った見え方をするのではないか。同じ思いで防災に取り組む中学生がいることを知れば，防災学習はまた違った見え方をするのではないか。「防災小説」の考案者である、慶應義塾大学の大木さと子准教諭の思いに共感した各校が集い

２０２１年１１月１７日　全国中学校「防災小説」交流会が開催されました。